大台ケ原を訪ねて

立沢史郎
（大阪教育大学理学科）

野生動物と日本人とのつきあいには，石を投げるか，餌を投げるか，という残念な選択枝しかなかったように思う。近年ようやく環境保全や野生動物保護の理念が広まり，それとともに野生動物と市民が〝ふれあう〟場面が積極的に求められるようにもなってきた。この〝ふれあい〟の内容とはもとより十人十色であるべきだが，（Natural History 歴史の浅い）日本では，最低限のマナーや観察の在り方を示し，経験するための「モデル地域」が必要になると思われる。幸い関西にもこれに適した場所がいくつかあり，奈良公園と大台ケ原はその代表といえよう。

両者とも，動物ではニホンジカが主な要素になっている。ニホンジカは非常に警戒心の強い動物だが，同時に馴化しやすい動物でもある。大台ケ原のニホンジカにもある程度の「人慣れ」がみられ，観光の目玉にもされるほどである。この状態は，禁猟と観光客のマナーの向上（及び冬季の閉鎖）により生み出されたもので，奈良公園にみられる「餌付け」とは異なり「人付け」に近いものだと私は考えている。よって，大台ケ原のシカとのつきあい方は奈良公園とはおのずと異なってくる。今回の見学会にあたって，シカを見る立場からポイントにしたかったのは，この人付けの状況を理解してもらうことだった。

もう一つのポイント，それはシカを通して植物（植生）を見てもらうことであった。大台ケ原では周知の如くトウヒの純林の存続が危ぶまれる程に樹皮食いが起こっている。（但しクマとの区別は必ずしも明確にされていない）現在各地でシカやカモシカによるいわゆる食害が問題になっているが，大台ケ原の場合，対象が植林木でないという点で他と異なる。造林地以外でも本来起こるべき問題がようやく起こったと言ってもよいだろう。他に樹種や部位，新旧を観たり，天候とシカの共同作業の結果と思われる草原化の進行を認めることもできる。また，1700ｍに迫る標高と位置から生まれる植物分布は，例えばミヤコザサとスズタケでシカの利用度（嗜好）が明瞭に異なる，というようなトピックも与えてくれる。

当日は，（頼んでおいた？）シカは半数の方がご覧になっただけで，また説明も要領を得なかったと反省している。ただ前述の二つのポイントについては，参加者の方々が日常自然に関心を持ち，つき合っておられる方ばかりで，説明も不要に感じたほどだった。むしろ私の方で，大台ケ原の利用について示唆されたことがあるのでそれを述べたい。

今回の観察会で，参加された方々の多様な構成及び動機は，私にとって象徴的であった。即ち研究者，教員，親，子供（？）……。実際，近年は単なるレクリエーションだけでなく，個人で調査・研究のテーマを持ったり，学校団体で自然教育の一環として大台ケ原を訪れる例が増えているようで，訪問者（ビジター）の目的と構成の多様化は今後更に進むと予想される。実は当日，かなりの時間を子供さん方と過ごしていたのだが，相手の年齢や目的に応じた指導のできる複数の指導者の養成が急務であることを改めて感じた。当り前の事と言われるだろうが，それがいま

（52ページに続く）

立沢さんには，この見学会の講師をお願いし，大台ケ原を案内していただきました。なお，立沢さんからは，後に行なわれた「シカと人と植物」のシシンポジウムについても，つづけて御意見をいただいているのですが，会誌の次号をシンポジウム特集といたしますので，次号に分けて掲載させていただきます。

ト，マンシュウ，シベリヤと同じ植生であるトウヒ，モミ属林が見られることは本当に幸せと言わざるをえない。美しい下生のミヤコザサも韓国北部のソーラク山，1,708ｍの麓で同じように見ることが出来る。丁度，大台ケ原シオカラ谷の森の山道に近くツツジやシャクナゲが咲乱れていた。その美しさもさることながら，高原の春景色の中に，枝を差しちがえたトウヒ，モミの樹形の素晴らしさに，ひとしお感激された方々も少なくなかったので，なかろうか。

吉野と大台ケ原の森と植物は，古代から人間と深い交わりを持ち続けた。同時にそこに住む鹿や動物たちも，人間の文化と深い係わりあいを持って来た。両者の間には生存の原理に従って色々と助合いも，争いも絶えなかったと思う。いま起こっている問題も，その一駒である。一日も早い解決を望んでおり，またその実現を信じているものである。

大台ケ原の山々に日も落ちた８時すぎ，予期しなかった野生鹿の訪問をうけた感激を噛みしめながら，山を下りた。

1988. 7. 7. 記す。

付記：見学会は1988年の春，５月28，29日の両日に行われた。

だに実現されていないし、関係当局で実現する努力がされているとも聞いていない。質の高い指導者がいることで、どれだけ子供たちの知性と感性が刺激されることか。それは頭の固くなった私たち大人にとって更に言えることかもしれない。

今後、大台ケ原の管理が議論されてゆく時に、自然とそれを利用する人と施設、という三つの管理対象が区分されるわけだが、それらを結びつける解説員・指導者（リーダー）の養成こそがこの貴重なモデル地域を生かすポイントであり、現在の（最大の）ネックである。そう再確認してバスに乗り、人であふれる駐車場を後にした。

おわりに、大台ケ原について考える機会を与えてくださったKONC事務局と参加者の皆様、特に子供さん方に感謝いたします。